

太田東西かわら版 2011.3

それぞれの「旅立ち」



1月22日、Aさん（88才）が永眠されました。
信用も実績もない開業当初の太田東西に、12年間、妹さんと2人で、月2回足を運んでくださいました。

12年間、月2回。単純に計算して288回の漢方相談。
Aさんの血流データは膨大な数ですが、それ以上にAさんとの「思い出」が私の脳に記憶されています。

Aさんは4人きょうだいの長子。妹さんは末っ子。年の差9歳。
Aさん13歳、妹さん4歳の時に、2人のお母さんは脳卒中で寝たきりとなりその3年後に40代の若さでお亡くなりになりました。

それからはAさんが、妹さんたちの母親代わりとなって、自らの青春時代を家族のために捧げました。

出棺の際、妹さんは誰よりも号泣されていました。
妹さんにとって、Aさんは姉というより「母親」だったんですね。

「どんな最期」を迎えるか

Aさんは子宮筋腫を患い、40才で子宮卵巣を全摘されておりました。手術の後遺症で大きく腫れ上がった足が小さくなることを楽しみに、漢方を続けてくださっていました。

Aさんにはお子さんがいませんでした。ご主人を亡くし、一人暮らしでした。

ある時、真剣な顔で

「死は怖くありません。ただ、コロッと逝きたいのです」とおっしゃいました。

いわゆる「ピンピンコロリ」で逝きたいと。

どうしてそんなこと？

私は、いつもお世話になっている妹さん家族への遠慮を感じました。

「万一、寝たきりになって妹家族に迷惑をかけたら...」

「長生きはしたいが、迷惑をかけてまで生きたくはない...」

生と死の葛藤だったと思います。

私は、Aさんと妹さん3人での面談を企画しました。

そして私は言いました。

「Aさん、妹さん家族に申し訳ないと遠慮されていませんか？ 妹さん家族がなぜ太田東西薬局に月2回、お姉さんを連れて来られると思います？

それはね、Aさんにこれまでよくしてもらったと感謝しているからだと思うんですよ。妹さん、きっとお姉さんへの恩返しなんだと思います。

お母さんを早くに亡くされた妹さんにとって、お姉さんは母親も同然。自分を大切に育ててくれたという愛情を、妹さん、しっかり感じているんですよ。

だから遠慮せず、世話になっていればいいんですよ。ねっ、妹さん？」

妹さんのほうに目をやると、涙を流されていました。
無言で、何度もうなずかれています。

「Aさんのこれからの人生の課題は、人を頼ること、人に甘えることかもしれませんね。もう1人で頑張ろうとしなくてもいいんですよ」

気丈なAさんの目にも涙が浮かんでいたことを、はっきりと覚えています。

それから2年後、Aさんは願いどおり「ピンピンコロリ」で逝かれました。

告別式で私の後ろに座っていた参列者の声が耳に入りました。
「心筋梗塞で急に逝ってしまって、さぞかし本人、無念だったろうな～」

私はAさんの遺影を見ながら、心の中で反論しました。
「違う、Aさんは自分の望みどおりピンピンコロリで逝けたんだ。
生への執着よりも、「死に方」を心配されていたんだ。
だから、『最高の最期だったよ～』と、きっと喜んでくれているはずだ」

「生は勝ち組、死は負け組」ではありません。

「どう生きて、どんな最期を迎えたか」

人生、長さではなく、「内容」が大切です。

死（最期）を忘れず、今を感謝して生きていけば、安らかに逝ける。

Aさんもまた、私に教えてくれたお客様の一人でした。

ありがとう、Aさん。

私も「安らかな最期」を目指して、感謝して生きて行きますね。

「思い」は残り、続く

2月12日、Iちゃん(30才)の結婚式。
太田東西は、人生初めて「主賓のあいさつ」を経験しました(汗)。

Iちゃんと太田東西のご縁は「おばあちゃん」。
脳梗塞の後遺症で不自由になったおばあちゃんに
少しでも良くなってもらいたいと、8年前に2人
で漢方相談にみえられました。
Iちゃん自身もストレスを抱え体調を崩し、将来
にとっても不安を感じていました。



披露宴での、親友のスピーチ。
「誕生日も、クリスマスも、バレンタインも、長くお互いに一人でしたね～
絶対に来年こそ！と、一緒に励まし合っていましたね～」

太田東西も励ましていました。
Iちゃんの漢方相談は、いつしか「結婚相談」になっていました(笑)。

彼女は、おばあちゃん子。
祝辞は、かわら版1月号「トイレの神様」をアレンジ。
開宴まもない段階で、花嫁を泣かせてしまった太田東西...。
形式よりも、「情」優先ということで、許してね。

新婦の手紙。「おばあちゃん、花嫁姿を見せられなくてごめんなさい...」と
涙で声を詰まらせていたIちゃん。いえいえ、おばあちゃんは、ご家族の愛情
をたくさん受けて、安心して昇天されたと思います。
だからあの世から花嫁姿も見ていたし、一番喜んでくれたと思います。

「思いやり」を人に与えれば、それは後から自分が受け取ることになります。
臨終の時だけではなく、この世から失せても、受け取り続けます。

「ありがとう...」

故人の肉体は無くなっても、故人への「思い」は残り、続くのです。